

リスク傾向が違反敢行に及ぼす影響

○森泉 慎吾^{1,2}・臼井 伸之介¹
 (1大阪大学大学院人間科学研究科・2日本学術振興会)
 キーワード: リスク傾向, 違反, リスクテイキング

The Effect of Risk Propensity on Violation
 Shingo MORIIZUMI^{1,2} and Shinnosuke USUI¹

(¹Graduate School of Human Science, Osaka Univ., ²Japan Society for the Promotion of Science)

Key words: Risk propensity, Violation, Risk taking

問題

違反と発生プロセスの類似した「リスクテイキング」に影響する要因であるリスク傾向(リスクを敢行する傾向性)について、森泉・臼井・中井(2010)はリスク傾向を多面的に測定するリスク傾向質問紙(RPQ)を開発した。RPQは、日常でのリスク傾向を①ギャンブル志向性(個人のギャンブル傾向)、②状況的敢行性(状況に左右される行動に対するリスク傾向)、③確信的敢行性(状況に左右されない個人の一貫した信念が存在すると考えられる行動に対するリスク傾向)、④安全性配慮(防犯や安全への配慮を伴う行動のリスク傾向)の4因子に分類する。またこれらの因子と過去の交通違反経験は関連する(森泉・臼井, 2010)。

これまでの違反研究では、実験環境において違反を誘発させる研究が複数報告されている(e.g., 和田・臼井, 2005; 中里・青山, 1969)。実験環境であれば、不安全行動に影響するリスク効用(e.g., McKenna & Horswill, 2006; 芳賀, 2007)等の要因を操作した検証が可能である。本研究では、和田・臼井(2005)の実験パラダイムに則り、リスク傾向が違反敢行に及ぼす影響について実験的に検証した。

方法

実験参加者 大学生 36 名(男性 20 名, 女性 16 名)であった。平均年齢は 19.67 歳(SD = 0.96)であった。

リスク傾向の測定 実験参加の募集時に RPQ に回答した。

課題 課題は知覚判断課題(ターゲットと判断基準との一致を弁別するダミー課題; Fig.1 左)と上書き課題(「知覚判断課題の保存」と称し、義務化した課題; Fig.1 右)で構成された。上書き課題には、上書き待機時間の発生(5 秒間)という時間的コストが伴った。

実験条件 上書きは省略可能であり、まとめて上書きが可能であることを教示した。その場合、上書きに失敗する可能性があり、「失敗 1 回につき 50 円のペナルティを科す」と嘘の教示をした。上書きの失敗確率は、0, 20, 50%の3水準であり、参加者間(各 12 人)で操作した。参加者が上書きに成功した回数を把握できるように、上書き回数を画面上に提示した。

リスク効用評価 上書きに伴うコスト感の評価(上書きをどの程度したくなったか)を実験後に 5 件法で尋ねた。

手続き 知覚判断課題の後に上書き課題について教示し、練習試行にて上書きが実際に失敗する様子、またその発生確率を体感させた。知覚判断課題 1 回と上書き課題 1 回を合わせて 1 試行として、計 144 試行の本試行を実施した。

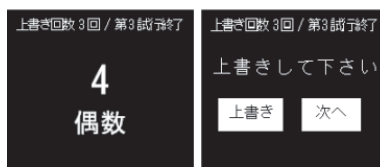


Fig.1 実験課題の模式図

分析 リスク傾向は、各因子を構成する項目の評定値平均を、値が高くなるほどリスク傾向が高くなるように逆転項目処理して算出した。違反敢行は、「本試行における上書きの省略の有無」によって区別した。リスク効用評価については、得点が高いほどより効用感が強くなるように処理した。

結果

本研究における違反敢行者は 7 名(19.4%)であった(0%条件 = 3 人, 20%条件 = 3 人, 50%条件 = 1 人)。実験条件によって違反敢行者数に差があるかを検定するため、 χ^2 検定を実施した。その結果、リスク条件による違反敢行者の構成率に差がなかった($\chi^2(2) = 1.49, n.s.$)。また、リスク傾向が違反敢行に及ぼす影響を検証するために、リスク傾向因子を独立変数、違反敢行の有無を従属変数とする変数減少法(尤度比検定法)ロジスティック回帰分析を実施した(Table 1)。その結果、状況的敢行性因子のみ有意に違反敢行に影響を及ぼすことが示された($B = 1.78, p < .05, Exp(B) = 5.91$)。オッズ比から、この因子の得点が 1 点上昇すると、本実験での違反を 5.91 倍しやすいことが示唆された。さらに、状況的敢行性因子の得点のみ、リスク効用評価得点と有意な正の相関関係にあった($r = .48, p < .01$)。

考察

本研究により、日常的に状況に応じてリスクを敢行する傾向にある者は違反を敢行しやすいことが明らかとなった。またリスク傾向とリスク効用評価との関係から、そのような傾向性が高い者は、リスクに伴う効用を高く評価し、結果リスクテイキングに至るというプロセスが考えられる。また、リスク条件の違いによって違反敢行率者の構成人数に差がないことから、リスクの発生確率は違反敢行に影響しないことが示された。すなわち、どの程度の確率でリスクを被るかではなく、「リスクを実際に被る可能性がある」とこと自体を行為者に知覚させることが違反抑制に重要であると考えられる。

引用文献

- 芳賀繁 (2007). 違反とリスク行動の心理学. 三浦利章・原田悦子 編 事故と安全の心理学 リスクとヒューマンエラー, 東京大学出版会 pp8-22.
 McKenna, P.F. & Horswill, M.S. (2006). Risk Taking From the Participant's Perspective: The Case of Driving and Accident Risk. *Health Psychology*, 25, 163-170.
 森泉慎吾・臼井伸之介・中井宏 (2010). リスクテイキング行動尺度作成の試み—信頼性・妥当性の検討— *労働科学*, 86(3), 127-138.
 森泉慎吾・臼井伸之介 (2010). リスク傾向と交通違反経験との関連. 平成 22 年度日本人間工学会関西支部大会発表論文集, 107-111.
 和田一成・臼井伸之介 (2005). 違反行動の生起におけるコスト要因とリスク要因の影響についての実験心理学的研究. 不安全行動の誘発・体験システムの構築とその回避手法に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(労働安全衛生総合研究事業)分担研究報告書, 49-69.
 中里至正・青山ゆり子 (1969). ルール違反行動の規定因に関する実験的研究 (I)—小学 6 年生のルール違反行動— *科学警察研究所報告* 防犯少年編, 10(1), 31-38.

Table 1 ロジスティック回帰分析結果

独立変数(共変量)	回帰係数	有意確率	オッズ比	オッズ比の95.0%信頼区間		Nageklerke R ²
				下限	上限	
状況的敢行性	1.78	$p < .05$	5.91	1.14	30.72	0.26
定数	-7.43	$p < .05$	0.00			